

ニモ無シト云フ。

右ノ如キ症狀ヲ發シタルハ古加因注射凡ソ十分後ニシテ一時間斗持續セシカ、同日午後四時頃ニ至リ稍々安靜トナリ、顔面少シク潮紅脈八十六ヲ算シ、精神元ニ復ス此ニ於テ佛様ノ事、霰ノ事、ヲ問フモ嘗テ覺エナシト云ヒ母ヲ指シテ、誰ナリト問ヘハ微笑シテ母ナリト答フルニ至レリ

同日ハ病院ニ宿泊セシメ其夜、回診ノ際檢セシニ更ニ常人ニ異ナルコトヲ摘出シタル竹片ヲ詠メツ、母ト共ニ爐ヲ圍テ談話セリ、以上述ヘタル處ノ要領ヲ摘記スレハ

- (一)古加因(○、一)注入后十分ニシテ著シキ興奮症狀ヲ發シタルコト
- (二)視器、聽覺ニ於テ「ハルチナチオン」ノアリシコト
- (三)中毒中ハ精神作用一部ハ確實ニシテ一部ハ錯乱セ

(論説及實驗)

金澤醫學會雜誌

シ

(四)中毒症狀ハ睡眠等ナクシテ二時三十分、後ニ全ク回復セシ

(五)脈搏呼吸ノ増加セシ

抄 録

◎胃ノ癌腫ニ於ケル胃加答兒

(Ztschr. f. Heilk. XII. 1891, S. 317)

ワグニ氏ハ十五人ノ胃癌腫ニ就テ病理上ノ變化ヲ試驗シ左ノ如キ成績ヲ得タリ蓋シ内六名ハ幽門ニ於テ、五名ハ噴門ニ、三名ハ小灣ニ一名ハ大灣ニ於テ生セシ者ナリ

表面ノ上皮ハ常ニ變化ヲ蒙リテ或部分ニ於テハ全ク欠損シ間組織ハ常ニ炎症ヲ有シ多少増加シタル小細胞ヲ以テ侵潤セラレ結締織ノ新生ヲ見ル

第三卷第二十六號

(五百十二)

胃粘膜炎ニ存スル腺ハ種々ナル變化ヲ現ス者ニシテ管狀腺ハ斜位或ハ粘膜炎ト併列シテ存スル者アリ、而シテ腺腔ノ狹窄スル者、腺ノ萎縮スル者、腺ノ囊腫狀ヲナス者及ヒ全ク其形ヲ失フ者等アリ

腺細胞ハ全ク試験シ能ハサル者アリ又或部位テハ被覆細胞及主細胞ノ著ク顆粒狀分解ヲ來ス者アリ

粘膜炎下筋層ニ於テハ屢々圓形細胞ノ侵潤、纖維狀物、及黃色素ヲ存スルコトアリ又他ノ場合ニアリテハ或ハ擴張シ、或ハ減少シ或ハ全ク消失スルコトアリ又此筋層ヲ貫通スル腺ハ常ニ破潰セラレ

粘膜炎下層ハ時トシテ著シク増加シ其血管壁モ肥厚ス因有筋層ハ通常變化ナク漿液膜層モ又然リト雖モ時トシテ細胞及血管ニ富ムコトアリ

◎ 鼓室中ノ異物摘出

(Monatsschr. f. Ohrenheilk. No. 5)

Jos. Gruber 氏ハ鼓室中ノ異物ヲ摘出センカ爲メ耳翼及外聽道ノ軟部ヲ骨ヨリ剝離シ次テ外聽道骨部ノ后上方ノ骨片ヲ三密迷斗鑿取シテ鉗子ヲ以テ異物(六密迷ノ直徑ヲ有スル角球)ヲ摘出セリ、創面ハ舊ノ如ク結節縫合ヲ行ヒ防腐帶ヲ施セシニ三週ノ後治癒ニ趣ケリ

◎ パセドワイ氏病ノ外科的療法

(Deutsche med. Wochenschr. 1891, No. 2.)

Lemke 氏ハ以前ヨリ甲狀腺腫ノ局部摘出術ヲ稱用シ自ラ二人ノ患者ニ之レヲ行ヒ長積ヲ得タリ即チ一名ノ若年者ハ全ク治癒シ第二ノ四十七歳ノ患者ハ充分職業ニ従事スル迄ニ快復セリ故ニ是迄ノ療法(實質注入等)ヲ用エテ効ナキ者ニハ手術的療法ヲ行フヘシト

◎ 急性貧血ニ食塩液注入ノ追加

(Prager med. Wochenschr. 1890, 17. Dec)

急性貧血ニアリテハ赤血球ノ減少、血壓ノ不足ニ由テ

腦貧血ヲ起シ患者ヲ死ニ至ラシムルコト少カラス此ノ如キ場合ニ於テハ〇、六%ノ食鹽液ノ皮下注入或ハ血管注入ヲ行フテ良積ヲ得ルコト屢々ナリ

「Falk氏ハシヤウタ氏ノ「クリニック」ニ於テ墮胎及卵巢摘出后ノ后出血ニ因スル急性貧血ニ食鹽液四〇〇、〇—五〇〇、〇ヲ皮下注入シ良積ヲ得タリト云フ

◎膿毒症患者ノ汗中黴菌ノ排泄

(Berl. Klin. Wochenschr. XXVIII 13. 1891)

「Falk氏ハ膿毒症患者ノ患部ニ於テ「スタフィロコッカスピオゲネス、アウロイス」ヲ有スル者ノ血中及發汗中ニ同一ノ黴菌ヲ有スルコト證明セリ蓋シ之ノ原發地ヨリ移轉セシ者ナリ又同氏二名ノ患者ニ就テ乳汁中ニ顯微有機体ノ排泄スル者ヲ經檢セリ

(以上五項) 界外仙「史抄錄

◎「デルマトル」ト「チオル」

(Charite-Annalenxv. p. 527. 1891)

「デルマトル」Dermatolハ近來沃度仿謨ノ代用品トシテ稱用セラル、黃色ノ粉末ニシテ臭氣ナク且危險ノ中毒症狀ヲ呈スルコトナシ之レヲ創面ニ用フルキハ非常ニ乾燥スルノ性質アリ又内用ニハ腸ノ疾患ニ強キ下劑トシテ要々ナリ

Buzzi氏ハ「チオル」Thiolチ一年半ニ二百人ノ患者ニ用エテ非常ナル良積ヲ得タリ殊ニ此藥ハ無臭ニシテ「イヒチオル」ノ如ク皮膚ヲ刺戟スルコトナク且中毒ヲ起スコトナシ其用法ハ塗擦、石鹼、膏藥、泥、粉末トシテ用ユ之塗布チスルキハ角様ノ膜ヲ生シ血管ヲ狹窄ナラシムB氏ニ從ヘハ急性エクセーム(二十%ノ水溶液)「アルリ」ゴ及プリチニスニ効アリト又「アクネ」ニモ用エ火傷ニハ水泡ヲ豫防スル爲メニ用フ

◎催眠及鎮靜藥トシテノ「ドッボ

イシン (同書)

Dr. Oetker 氏ハ硫酸「ドッポイシン」ヲ鎮靜及催眠劑トシテ錠劑トナシ用ヒタリ蓋シ其量ハ〇・〇〇一ヲ用フルニアリ今之ヲ他藥ニ比スルキハ其効著シ加之ナラス之レチ皮下注入トシテ用フルモ決シテ膿瘍ヲ構成スルコトナシト云フ

◎局所麻醉藥

(Deuts. Wochens No.41, 1891)

局所麻醉藥トシテ左ノ藥劑ヲ用フ

處方 硫酸依的兒 七五・〇 石炭酸 〇・三

用法ハ發霧器ヲ以テ局所ニ散布スヘシ蓋シ此液ハ單ニ依的兒ノミヲ用フルヨリハ強ク働キ且キ速ニ知覺ヲ失フノミナラ永時間保續スト云フ

◎初生兒ノ授乳法

(D.M.W. 1891, Wo.41)

巴里ノ產婆 Mme. Lefevre 氏ハ衰弱シタル初生兒ノ哺乳困難ナル者ニ食道ソノデヲ以テ營養物ヲ送ルコト稱用セリ其裝置ハ十五號ノ「ゴム」消息子ヲ母乳ニ結合セル乳被 (Saughuetchen) ニ連繫シ乳汁ヲ直チニ小兒ノ胃中ニ送ルニアリ但シ初メノ間ハ十五分毎ニ之レチ行ヒ後ニハ每三十分時ニ行フ、「ツンテ」ノ挿入ハ極メテ容易ニナル者ニシテ母体自ラ之レチ爲シ得ン又「ツンデ」ノ長ハ胃ヨリ唇マテハ十二仙迷ヲ要スト

◎ファウスノ療法

(Deuts. med. Wochens. No. 43)

Estavos 氏ハ「ファウス」ニ「レゾルチン」ヲ用フルコト稱用セリ氏ノ經檢ニ由レハ此藥ハ大ニ「ファウス」ノ蔓延ヲ防禦シ之レチ治スルノ効アリト然レハ Kapost 及ヒL. 氏ノ說ニ依レハ有毛部ニアル者ハ數月間用フルニ非ラカレハ効ナシト云ヘリ、其用ハ先ツ痂皮ヲ除去シ

患部「テール」石鹼及昇汞或ハ石炭酸水ヲ以テ清潔ト
ナシト八ノ比例ヨリナル「レツルチン」液ヲ塗布スル
ニアリ

◎ラミナリアノ無痛挿入法 (同書)

Lefourn氏ハ次ノ混合液ヲ子宮頸管ノ擴張ニ要スルラミ
ナリアニ用エテ常ニ無痛ニ挿入スルヲ得タリ即チ

硫酸依的兒 八五、〇 沃度仿謨 一〇、〇

古加因 五、〇

此液中ニ「ラミナリア」ヲ八日間侵漬スヘシ

◎夜尿ノ簡易療法 (同書)

Pratt氏小兒ノ夜尿ニ極單簡ナル療法ヲ行ヒ十四人ヲ
治癒セシメタリ其法ハ只寢臺ノ足端ヲ少シク高クスル
ニアリ蓋シ尿ノ膀胱中ニアルヤ常ニ尿道内口部ニ蓄留
スルカ故ニ直チニ排尿シ易シト雖モ前述ノ如キ位置ヲ
取ラシムルキハ尿ハ膀胱ノ上部ニ蓄留スルヲ以テ例之

膀胱括約筋ノ不全閉鎖アリト雖モ直チニ遺尿スルカ如
キヲナシ、 (以上七頃愛夢道人抄録)

◎「はへとりたけ」ノ成分ニ就テ

(東京醫學會雜誌第五卷十七號)

猪子吉人氏ハ殺蠅菌ヨリ三種ノ異質物ヲ得タリ(其一)
ハ針狀ノ結晶ニシテ容易ニ「コロ、ホルム」ニ溶解シ之
レニ同量ノ硫酸ヲ注ケハ始メ血紅色ヲ呈シ後チ紫紅色
トナル又結晶ノ少量ニ濃硝酸ヲ加ヘテ蒸發スレハ黃斑
ヲ殘シ之レニ安母尼亞ヲ滴下スレハ美麗ナル赤色ヲ呈
ス之レニ由テ考フレハ「コレステアリン」若クハ「フ#ト
ステリン」(Chyosterin)ニ類似ノ者タリ(其二)ハ褐色鱗
片狀ノ色素ニシテ水ニ溶ケ著明ノ酸性ヲ呈ス故ニ一種
ノ酸ナル必セリ之レヲ固形ノ儘試験管ニ投シテ熱スル
キハ白色ノ蒸氣ヲ放チ管ノ冷所ニ無色細小ノ針狀結晶
ヲ沈着ス之レ恐クハ色素ノ分解スル際琥珀酸ヲ生セシ

者ニシテ該色素ハ化學上「フェノール」類ニ屬スル者ナラン(其三)ハ亞篤魯必涅ニ類スル「アルカロイド」ニシテ蛙ノ心臟ニ「ムスカリン」ヲ注入シ開張期ニ靜止スルヲ待テ此液ヲ注入スルキハ須臾ニシテ心臟忽チ鼓動ヲ初メ暫時ノ后全ク回復ス之レニ由テ見レハ「はへどりたけ」中、曩ニ氏カ檢明シタル「ムスカリン」ノ外尙ホ「アトロピン」様ノ類攪基ヲ含ムヤ明ナリ

◎脚氣婦人ノ乳汁ハ小兒ニ害アリ

(東京醫學會雜誌第五卷第十八號)

醫學博士弘田長氏ハ脚氣病ニ罹レル母乳ノ哺乳兒ニ害アルヲ報告セリ、氏カ十四名ノ小兒ニ就テ經檢セシ症候ヲ約言スレハ大抵吐乳ヲ以テ起リ神思不安、啼泣多ク、食思減退、便秘若クハ下痢(綠便、帶黃綠)舌苔、尿利減少等ノ症狀加リ皮膚蒼白、身軀羸瘦、元氣疲勞、全身殊ニ足、手、面ノ浮腫等次テ發シ時トシテ多少ノ發熱

アリ、尿中蛋白ナシト而シテ左ノ結論ヲナセリ(一)母若クハ乳媪ノ乳汁ニ依レル乳兒ニ於テ本病ヲ發シ稍、長成シタル者又ハ牛乳ニ由テ養育セラレノ者ニハ來ラス(二)脚氣ノ多キ季節即チ五六月ニハ本病亦最モ多シトス(三)母氏若クハ乳媪ノ脚氣ニ罹リタル后、大抵二十五週日ニシテ發病ス(四)腸胃症ノ治法ヲ種々試ムルモ病勢依然タルカ或ハ増進スル者カ然ラサレハ母氏脚氣ノ輕快スルト同時ニ漸治ス(五)母乳若クハ乳媪ノ(脚氣ニ罹レル)乳ヲ癩スルキハ速ニ治癒ス(六)母氏ノ脚氣ヲ發シ及其治癒ノ時日ト殆ント相併行シテ二年ノ間毎年同一ノ症狀ヲ乳兒ニ發シタル第二ノ病床記事(之レヲ略ス)及病勢大ニ輕快シ殆ント治癒シタル者ニシテ母体ノ脚氣急ニ増劇シタルト同時ニ殆ント治癒シタル乳兒疾患ノ再發増進シタル第八ノ病床記事(之レヲ略ス)ハ本論ヲ確ムル好材料ナリトス

◎綿馬越幾斯ノ毒性殊ニ其視力ニ

及ホス關係

(東京醫學會雜誌第五卷二十三號)

片山國嘉及岡本梁松ノ兩氏ハ綿馬越幾斯ノ毒性ニ就テ
精細ナル動物試験ヲ行ヒ左ノ如ク結論セリ

(一)綿馬Xニハ毒性アリテ重ニ消化器系ト神經中樞系
トテ侵害シ以テ嘔吐、下痢、腹痛、頭痛、歩行困難、瞳孔
散大、現力減衰、呼吸促進、運動麻痺、虛脱等ノ症狀ヲ呈
ス

(二)綿馬X中毒ノ報告殆ント往者ニ見エスシテ輓近ニ
多キ主ナル原因ハ近來其用量ノ著シク増加セルニアリ
、綿馬Xノ効力ハ其產地及ヒ製劑ノ新舊等ニ由テ差異
アルカ故ニ其中毒量ハ一定シ難シト雖モ概シテ其多量
ヲ用フルキハ必ス略ホ一定ノ中毒症狀ヲ呈スル者ナリ
(三)綿馬Xノ用後時トシテ失明症狀ヲ呈スルコトアル

ハ事實ナレモ必發ノ現象ニ非ラス唯或一定ノ場合ニ於
テノミ此症ヲ呈スルコトアルノミ

(四)失明症狀モ又綿馬X中毒症狀ノ一ナルヲ以テ其他
ノ中毒症狀ト併發スルコト多キハ勿論ナリト雖モ必スシ
モ用量ノ多寡及ヒ用法ノ如何ニ係ルモノニ非サルカ如
シ

(五)諸家ノ實驗報告ヲ通覽スルニ綿馬Xノ用後失明症
狀ヲ呈セル患若クハ大抵皆身體ノ虛弱ナル者ナリキ又余
等カ此藥ヲ試用シテ失明セル二頭ノ犬モ交幼弱ノ者ナ
リキ而ノ一般ニ中毒性弱視、若クハ失明(例之酒客失明)
煙毒失明ハ身體虛弱ノ者ニ多シ是レニ由テ推考スレハ
綿馬Xノ用後最モ失明症ヲ發スルノ恐レアルハ身體虛
弱ノ者ナリ但シ虛弱者盡ク然ルニアラスノ其内特ニ綿
馬Xノ毒性ニ感シ易キ者アルナラン

(六)上來錄載スルカ如クナルヲ以テ治療家ハ用ニ臨テ

大ニ注意スル處ナクンハアルヘカラス即其注目點ハ左ノ如シ

(1) 綿馬 X ハ成ル可ク少量ヲ用フヘシ

(2) 綿馬 X ナ油類ニ和シテ用フルキハ吸收シ易シ然ラサルモ久シク胃腸中ニ停滯スルキハ吸收セラレ易シ故ニ之レヲ避クヘシ

(3) 綿馬 X ノ用後「リチチ」油ヲ用フヘカラス必ス其他ノ下劑ヲ與フヘシ

(4) 綿馬 X ナ用キタルキハ常ニ頭痛及視力減衰等ノ發症ニ注意シ若シ少シニテモ此等ノ徵アルキハ速ニ後服ヲ止ムヘシ

◎近視ノ手術的療法

(東京醫事新誌第七百十四號)

河本重次郎氏ハ F. F. F. 氏ノ法ニ從ヒ強度ノ近視者ハ左眼ハ三度ニシテ視力 20/200 ナ有シ右眼ハ三度半ニシテ視

力 70/20 ナル者) ニ五回ノ截囊術ヲ行ヒ九ヶ月ノ后ニ視力 20/20 ニ回復セシ者ヲ報導セリ蓋シ此法ハ水晶体囊ヲ截開シテ水晶体ヲ吸收セシムル者ナレハ己ニ水晶体核ヲ有スル者ハ不可ナリ (F. F. 氏ハ二十四歳迄ノ者ヲ撰擇セリ) F. F. 氏ノ法ニ依レハ初メ虹彩切除ヲ行ヒ内壓亢進、續發症等ヲ豫防スルニアリト雖凡若シ之レヲ行ハサルキハ左ニ注意スヘシ(一) 眼球ノ膨脹少ナケレハ施鍼ヲ反復シ或ハ温罨法ヲ施スヘシト雖凡(二) 膨脹甚シケレハ水囊ヲ用エ(三) 緣内障ヲ起スノ憂アラハ「エゼリレ」ヲ點眼シ(四) 之レナキキノ毎週兩三日「アトロピン」ヲ點眼スヘシ(五) 若シ早ク水晶体ヲ去ルノ必要アラハ己ニ截囊法ニ由テ「カタラクト」ニ陥リシ者ヲ法ニ從テ取ルヘシ

此手術ハ近視五六度以上ニシテ眼鏡ヲ用フルモ功ナキ者ニ行フヘシ又注意スヘキハ截囊術後ハ水晶体ノ全ク

吸收セラル、迄(凡ソ半年)視力ヲ失フカ故ニ豫メ之レヲ懇諭セサルヘカラスト

(右四項) M, I, 生 抄 録

◎「ヒオクタニン」ヲ鼻咽喉病ニ用フ

(Therap. Mon-Hefte W. 10. 1890)

Bresgen. 氏ハ「ヒオクタニン」(メチールヒオレット)ノ一〇一〇三二五、〇ノ液ヲ撒糸綿ニ浸シ患部ニ布着セシメ其部ノ青色ニ染色スルヲ度トス。B. 氏ノ説ニ依レハ此藥ヲ適症ニ用フルキハ炎症、疼痛、及化膿ヲ防禦シ得ヘシト

◎窒扶斯ノコロ、ホルム療法

(Munchn. med. Wchnschr. XXXVII(46))

Dr. Stepp 氏ハ早ク「コロ、ホルム」ヲ合嗽劑トシテ用ヘ又慢性胃潰瘍、格魯布性肺炎、窒扶斯ニ稱用セリ、窒扶斯ニハ一、〇〥一五〇、〇チ一日三回ニ用フ氏カ十八名

ノ患者ニ經檢セシニ神經症狀及熱ハ佳良ノ經過ヲ取レリト蓋シ此實驗タル未ダ少數ナルカ故ニ其作用ハ詳ナラスト雖氏恐クハ「コロ、ホルム」ノ制菌作用ニ依ルナラン

◎局所結核性疾病ニ沃度仿護注入

(Munchen med. Abhandl. III. 1.)

Dr. o. Weidemann 氏ハマンゲレル氏ノシリニシニ於テ局所結核ニ沃度仿護ノ十%「クリセリン」液ヲ注入シテ左ノ成績ヲ得タリ即チ七人ハ全治シ十一人ハ著シク輕快シ三人僅カニ佳良トナレリ獨リ手腕關節ノ者ニハ無効ナリキ

◎濾胞性咽喉炎ノ原因ニ就テ

(Vgl. Pflannstiel Jharhb. ccXXI.)

Dr. J. sandner 氏ハ濾胞性咽喉炎ノ四患者及フレクモネ性咽喉炎ノ一患者ガ扁桃腺ノ膿中ヨリ、スタフィロコ

ックス、ピオケネス」ト區別スヘカラサル黴菌ヲ發見セリ、蓋シ此ノ如キ者ハ不良ノ經過ヲ取り或ハ丹毒若クハ一般ノ傳染病ニ移行スルコアリ

◎新沃化合物「オイロフエン」

(Ebenda P. 219)

F. Banger 商會ニ於テ沃度ト「フェノール」ノ化合物ナル「オイロフエン」Europhen (Isobutylocthoacrosoljodid) ト名ツクル沃度仿該ノ代用藥ヲ創製セリ Gielis 氏ノ說ニ依レハ決シテ沃度仿母ニ劣ラスシテ反テ無臭ナルト無害ナルカ故ニ彼レニ勝レリト

Eichhoff 氏ハ之レヲ生殖器ノ疾患ニ用エタリ蓋シ淋疾ニハ適セスト雖卮下疳ニ非常ノ卓効アリ、第二及第三期ノ梅毒ニ皮下注入(一日〇、一)トシテ用エテ効アリ其皮膚病ニハ一般ニ稱用スヘシ但シ濕氣ヲ帶フルキハ分解スルカ故ニ注意スヘシ

◎麻刺利亞「プラスモシユム」ノ

診斷上價直

(Berl. klin. Wchnschr. 12)

O. Hertel 及 Noorden ノ兩氏ハ二名ノ患者ニ就テ之ヲ報告セリ内一名ハ長ク間歇熱ニ罹リシ者ニシテ且肺結核ヲ有セシカーノ「プラスモシユム」ヲ發見セサリキ他ノ一名ハ第一ノ發作後直チニ之レヲ發見シ診斷ヲ確定スルコトヲ得タリト H 氏等ノ說ニ依レハ「プラスモシユム」ハ診斷上非常ノ價値ヲ有スル者ナリ加之其檢法ハ甚タ單簡ニシテ油浸裝置ヲ用フルキハ直チニ血液ニ於テ之レヲ發見スヘク若シ之レナキハ血液ノ乾燥プレパラトチ「メチールプラウ」或ハ「マラヒットグリン」ニ由テ染色シ檢スヘシ

◎口腔呼吸ト夜尿症

(Obl. Bl. F. Kim, Med. XII 23, 1891)

Dr. Otto Koerner 氏ハ十歳及三歳ノ遺尿患者カ鼻茸ヲ摘
出セシニ全然夜尿ノ治癒セシ者ヲ經檢セリ、

◎「レソルチン」ノ内服

(Centr.-Bl. F. Klin. Med. XII. 21)

Dr. H. Menche 氏ハ種々胃疾病ニ因スル(新シキ潰瘍ヲ
除キ)小兒及大人ノ嘔吐ニ之レヲ稱用セリ(小兒ニハ
〇、三—〇、五—百瓦ヲ二時毎ニ一茶匕大人ニハ一%
ノ者)殊ニ胃癌、胃擴張、及妊婦ノ嘔吐ニ用ヒ又船暈ニ
モ催眠藥トシテ稱用ス

此ニ注意スヘキハ新鮮ナル者ヲ投セサルヘカラス又此
藥ハ阿片、食鹽「コンドラソゴ」ト伍用スヘシ

◎梅毒性潰瘍ニ格魯酸

(Therap. Mon.-Hefte. v.6. 91)

Kutner 氏ハ咽頭ノ頑固ナル梅毒性潰瘍ニシテ他ノ療法
ノ効ナキ者ニ格魯酸ノ灼燒法ヲ稱用セリ即チ其結晶ヲ

銀ノツンデヲ以テ狹ミ潰瘍ヲ塗擦スルニアリ蓋シ此
法ヲ行フキハ一二日ニシテ痂皮ヲ去リ三—十四日ニシ
テ治ス

(以上九件)

飯森益太郎 抄録

本會記事

◎第二十八回常集會記事

同會は本月十九日午後二時より當醫學部生理學教室に
於て開會せり參集者は十四名にして飯森益太郎氏の古
加因中毒の一奇症と題る演説あり(載せて本號にあり)
暫時休憩の後醫學上に關する談話をなし散會せしは午
後四時頃なりき

◎本會々員交名 (十二月調)

金澤市天神町四丁目三十五番地 石 井 秀 齋
同 十三間町中丁十七番地 飯 森 益 太 郎

金澤病院

池上政雄

同 木町二番丁

本保徳太郎

金澤市新堅町三丁目十三番地

伊藤清治

羽咋郡南邑知村字菅原

發田清二

石川郡野々市村二番地

稻坂壽啓

富山縣礪波郡中田町

本方鼎吉

北海道札幌病院

池龜祐藏

風至郎輪島河井町

富永良

廣島縣廣島市猫屋町五番地

今井亥三松

金澤市彦三八番町

本田鎗二

金澤市高岡町

石崎喜一郎

羽咋郡羽咋町

藤彌博

同 北石坂町十四番地

橋本貞衡

能美郡小松町

土岐木工

同 材木町六丁目

長谷川三省

宮城縣仙臺市元鍛町二番地白石時俊方

沼田布之

同 高儀町

林則友

金澤病院

大木則雄

東京四ツ谷區南寺町三十七番地

長谷田務

金澤市春日町一丁目

岡部幸一郎

金澤市淺の川上川除町

蓮村外男

金澤病院

岡田剛吉

朽木縣宇都宮一條町三十六番地

原温恭

金澤市長土塀通

太田美濃里

越中福光西村藥磨石川縣石川郡上安原村

西本守義

全下傳馬町七十二番地

沖野彌一郎

金澤市六斗林五十八番地

寶嶋津志馬

同 彦三一番丁

岡本三作

石川郡一木村字村井乙十二番地

得田易

石川縣羽咋郡宿村

岡野林次郎

| | | | |
|--------------------------|-------|-------------------------|-------|
| 同 鳳至郡櫛比村 | 岡京本太郎 | 珠洲郡宇出津 | 河合秀波 |
| 同 羽咋郡富來村領泉町 | 岡田俊英 | 石川郡金石味噲藏町 | 角田元伯 |
| 第四高等中學校醫學部 | 尾島政憲 | 第四高等中學校 | 加須屋武留 |
| 新潟縣佐渡雜太郡相川町二丁目 鑛山局 | 小野琳平 | 金澤病院 | 勝木直吉 |
| 第四高等中學校 | 荻野義勝 | 北海道函館病院 | 吉田茂人 |
| 熊本鎮臺 | 小原芳雄 | 第四高等中學校醫學部 | 吉野貞吉 |
| 新潟縣南魚沼郡上一日市村 | 岡村寬造 | 同 | 橫山 軫 |
| 岐阜縣彈飛國吉城郡船津町千五百 五十七番地 | 小北老松 | 京都室町二條下ル大屋督方 | 米村吉三郎 |
| 第四高等中學校醫學部 | 渡邊順太郎 | 第四高等中學校醫學部 | 橫地重清 |
| 金澤市寶船寺町 | 河崎規矩 | 金澤市泉町二十四番地 | 吉澤常信 |
| 同 桶町十六番地 | 笠間大作 | 河北郡南森下町 | 由田甚作 |
| 同 尻垂坂通 | 開運音吉 | 第四高等中學校醫學部 | 高安右人 |
| 第四高等中學校醫學部 | 川瀬泰輔 | 富山縣射水郡女部村字姿村九百 七十八番地 | 瀧川一定 |
| 金澤市寶船寺町四十一番地 | 河村源造 | 石川郡廣岡村 | 田 遞 庸 |
| 羽咋郡高濱町 | 河崎公平 | 金澤市下觀音町五十番地 | 田 上 貢 |

(本會記事)

金澤醫學會雜誌

第三卷第二十六號

(五百二十三)

金澤病院

竹 腰 慶 三

富山越前町九番地

内 藤 實

金澤市尻垂坂通

田 中 正 鐸

富山縣礪波郡津澤町

中 島 壯 五

金澤市梅本町

高 峯 精 一

第四高等中學校醫學部

中 山 敏 夫

同 下新町

田 中 信 吾

同

永 井 健 次 郎

第四高等中學校醫學部

高 松 多 齊

金澤市彦三七番丁

永 井 貞 之

東京本那區龍岡町廿一番地蒲山方

高 橋 善 三 郎

石川郡瀧津村字大河端村二六十
九番地

中 村 又 雄

金澤市八坂町七番地

田 中 善 吉

金澤市宗叔町

村 上 眞 惠

同 横安江町

田 中 榮 太 郎

同 野町六丁目十七番地

村 上 敬 三

河北郡木津村

竹 内 養 安

羽咋郡羽咋町

村 松 紀 清

第四砲等中學校醫學部

高 柳 元 六 郎

金澤市岩根町

村 上 文 齊

金澤市河原町

津 川 恒

同 百姓町二十五番地

村 田 太 次 郎

北海道札幌病院

土 川 一 吉

金澤市西町藪ノ内

上 杉 寛 二

金澤病院

辻 本 良 伸

同 長町五番丁

宇 野 鍋 松

金澤市石坂與力町三十二番地

中 村 順 次

礪波郡福光五寶町六千九百七十
七番地

上 原 秀 三

江沼郡大聖寺京町十九番地

中 島 政 吉

越中射水郡入膳驛

野 島 嘉 三 郎

福岡縣福岡町簀子町大野方
 東京赤坂區青山此町一丁目八番地
 大川方
 第四高等中學校醫學部
 金澤市鍛冶町
 同 三搦町
 第四高等中學校醫學部
 同
 河北郡津幡町字庄五十番地
 福井縣今立郡高木村
 能美郡小松龍助町百十四番地
 第四高等中學校醫學部
 長野縣更級郡稻荷山町中丁二百九番地
 金澤市堅町六十番地
 長野縣佐久郡望月病院
 北海道後志國余市病院

納富嘉太郎
 野口詮太郎
 野崎彌三郎
 久保百貳
 久保策二
 黑柳精一郎
 黑川庄太郎
 久津見會信
 久保田房吉
 國分又勝
 山田謙治
 山田孝太郎
 山本末松
 谷中正勝
 山崎秋津磨

金澤市新堅町三丁目
 第四高等中學校醫學部
 同
 同
 江沼郡大聖寺鷹匠町六番地
 石川郡下金石蓮池町
 球州郡飯田町
 金澤市英町
 同 彦三四番丁
 同 古道町百番地
 尾山病院
 第四高等中學校醫學部
 金澤市櫻島六番丁二番地
 尾山病院
 第四高等中學校醫學部

松井宣正
 松川泰一郎
 丸山耕平
 摩馬嘉藏
 馬島謙吉
 松山五七郎
 松本榮五郎
 松本善三郎
 牧野慎一
 松崎良太郎
 藤本純吉
 藤井秀
 藤田繼太郎
 不破鎖吉
 藤井順三

(本會記事)

金澤醫學會雜誌

第三卷第二十六號

(五百二十五)

金澤市泉新町

兒島幸

大津營所

笹川宗治

石川郡上金石松原町百三十九番地

小島實

同野町二丁目

才紀甚太郎

金澤市堅町三十番地

古丸藤三郎

河北郡蚊爪村二十二番地

澤村敬吉

名古屋武平百二十九番地

寺西幸作

石川郡戶板村字示野

澤田定信

金澤市高道町八十七番地

遠藤昌平

福井縣今立郡上池田村

齊藤正雄

第四高等中學校醫學部

井口泰作

第四高等中學校醫學部

坂井登幾太郎

同上石引町三番地

相澤端監

第四高等中學校醫學部

木村孝藏

富山縣新川郡魚津大町四十五番地

阿波加蕃

彦三七番丁

北村雄平

第四高等中學校醫學部

藍澤直方

岡山縣岡山市廣瀨町百十七番地

岸千尋

青山縣中津輕郡黑石市ノ町

跡地靜夫

大工町十三番地

木村悌四郎

第四高等中學校醫學部

有松戒三

越中東岩瀨橫町

北村康太郎

金澤市味噌藏町

澤田外三郎

富山縣礪波郡今石動細工町

雪野要言

大聖寺病院

佐藤精倍

第一高等中學校

行山辰四郎

坂井迪太郎

金澤市長町川岸町

宮橋行隆

同上松原町

佐藤乙三郎

宗叔町

水上鍬次郎

羽咋郡羽咋町

宮崎謙吉

同 彦三三番丁

森友道

金澤市木町

白井清繁

同 彦三二番丁

守屋一

同 白根町

清水衡

同 小將町

瀬尾順四郎

同 材木町六丁目十九番地

嶋元恭

東京本卿真砂町八番地大内方

關野岸吾

第四高等中學校醫學部

下坂雄太郎

越前國三國町舊日和山

瀬戸字三郎

同

敷波重次郎

第四高等中學校醫學部

關根倉治

名古屋第六聯隊

篠尾明濟

第三高等中學校醫學部

瀬尾原始

石川郡成村辰一番地

神保進

金澤市中橋町

洲崎周平

下今町

引田伊之吉

同 七寶町

洲崎順吉

材木町四丁目十番地

平賀東吾

同 東馬場町

鈴木忠順

河原町

疋田準吉

越中下新川郡魚津大町

鈴木泉

江沼郡山代

平泉昭

金澤市材木町六丁目

杉原幹男

金澤市長田町六十一番地

本仙太郎

羽咋郡末森村字今濱

鈴木秀英

同 材木町二丁目

森島重太郎

◎寄贈書目

同 堅町四十番地

守部謙造

岡山醫學會雜誌第二十三號……………

同 會

| | | |
|------------------|---|---|
| 國家醫學會雜誌第五十四號 | 同 | 會 |
| 杏林之槩第三卷八號 | 同 | 會 |
| 裁判醫學會雜誌第四十八、九號 | 同 | 會 |
| 醫事研究會中報第四十五號 | 同 | 會 |
| 輓近外科學會雜誌第三十三號 | 同 | 會 |
| 熊本醫學會雜誌第六十號 | 同 | 會 |
| 京都醫學會雜誌第四十六號 | 同 | 會 |
| 私立獎進會雜誌第三年第七號 | 同 | 會 |
| 大坂興醫學月報第三十五號 | 同 | 社 |
| 北海道醫事講談會月報第三十一號 | 同 | 會 |
| 福井縣醫學會雜誌第三號 | 同 | 會 |
| 成醫會月報第十七號 | 同 | 會 |
| 東京醫學會雜誌第五卷二十一、二號 | 同 | 會 |

時事

◎國家醫學講習科

第五回國家醫學講習科に於ては本月十四日より卒業試問と施行せられ同二十五日に證書を授與せらる、由●第六回國家醫學講習科は來二十五年一月十五日より授業を始めらる、由にて略ホ生徒も決定せられたりど又右第六回の結了したる上は規則を改正せらる由に聞く

◎知命堂病院開院式

新潟縣下高田町に於て瀨尾原始氏の創設に係る知命堂病院は去る十一月廿九日開院式を舉行せられたる由に聞く

◎京都醫術開業試験及筆者

本年第二回京都醫術開業試験を受けし者の内去月十九日試験委員長代理より及第證を與へられたる者は左の如し

前期

| | | |
|------------|-----------|------------|
| 野田 武男(三重) | 益田 清人(廣島) | 金中安太郎(岡山) |
| 田中 萬吉(全) | 渡邊雄二郎(島根) | 田付清太郎(兵庫) |
| 細川 過郎(全) | 横田 三郎(高知) | 宮原 太七(山口) |
| 若菜 勝男(全) | 猪子 郡吉(德島) | 田中 彌吉(鹿兒島) |
| 元橋 覺松(奈良) | 後藤 道伯(山口) | 植村 孝憲(三重) |
| 末本 吾市(廣島) | 小林孝太郎(三重) | 澤 順策(兵庫) |
| 米澤 貞二(全) | 森二 郎(岡山) | 喜田忠次郎(全) |
| 近間 久雄(山口) | 臣川綾治郎(德島) | 加藤 正邦(愛媛) |
| 森田學太郎(兵庫) | 菅波森太郎(廣島) | 高橋 米磨(全) |
| 三森 定吉(石川) | 堀 信次(滋賀) | 長崎 亮(和歌山) |
| 立石 榮江(長崎) | 長山 泰春(高知) | 末光寅五郎(愛媛) |
| 松本 尙二(和歌山) | 藤原 卯市(岡山) | |
| 上野 六助(全) | 嶋崎 元江(高知) | |

後期

駒井菊太郎(奈良) 伊東 了(佐賀) 阪本 友吉(和歌山)

| | | |
|-----------|-----------|------------|
| 清瀬宗壽郎(滋賀) | 有田 梅松(島根) | 中村幾三郎(高知) |
| 佐々木杏造(大分) | 西尾彌三郎(兵庫) | 小森 喜納(鹿鹿島) |
| 菊池音之助(長野) | 木村 泰雄(福島) | 小橋 和以(廣島) |
| 舟橋梅太郎(高知) | 士井 與助(石川) | 田村 德馬(高知) |
| 田中 敬造(兵庫) | 谷川 良順(兵庫) | 高島善之助(全) |
| 鳴島 研吾(山口) | 手島 利魚(高知) | 下阪區間太(全) |
| 西岡平三郎(岡山) | 武内 武(全) | 高月 參(愛媛) |
| 後藤豊太郎(鳥取) | 坂堂熊次郎(奈良) | 石光 一美(廣島) |

○富山縣病院長

全病院長池邊棟三郎氏は先般辭職せられたるに付き其後任として大學内科學研究生たりし醫學士竹村一詮氏か同病院へ此程赴任されたりと

○學生卒業

醫科大學々生古川市次郎(德島)近藤與十(神奈川)兩氏は醫科大學全科を卒業せられたり

◎生徒卒業

第一高等中學校醫學部生徒左の諸氏は卒業試問に及第し醫學全科を卒業せられたり

| | | |
|------------|------------|-----------|
| 赤城 計吉(茨城) | 長峯總一郎(千葉) | 小谷 靜彌(愛知) |
| 大塚美代四郎(千葉) | 吉橋 旬一(千葉) | 清水重次郎(埼玉) |
| 細谷喜三郎(群馬) | 齋藤 乙吉(千葉) | 早川恭太郎(山梨) |
| 猪狩省三郎(東京) | 佐々木辰太郎(群馬) | 和久井平三郎(栃) |
| 松林 健吉(香川) | 柿崎小太郎(長野) | |

◎本邦製「ツベルクリン」

東京衛生試験所に於て此程製造せる「ツヘルクリン」は原「ツヘルクリン」と理化學上の性質に於て大差なきのみならず動物に十分の反應を呈し其百瓦中に含有する窒素、偏里設林、格魯兒等の量は左の如くなりと云ふ

| 成分別 | 種 | |
|------|------------|------------|
| | 獨逸「ツヘルクリン」 | 本邦「ツヘルクリン」 |
| 窒素 | 二、七二四四 | 三、四〇三二 |
| 偏里設林 | 三七、〇六〇〇 | 一五、八九五〇 |
| 灰分 | 六、六二三三 | 七、四〇一四 |
| 格魯兒 | 二、九五〇六 | 三、二四一五 |
| 比重 | 一、二〇八 | 一、一九五 |
| | | 一、一六七 |

右比較検査の成績によれば本邦製「ツベルクリン」は獨逸製「ツベルクリン」と頗る近似し唯偏里設林の含量に於て本邦品は約二分一に過ぎざるのみ最も此比較成績を得て尙大に改良すへき見込なりとのことなり

(藥學雜誌)

◎「トベルクリン」に関する報告

プロフェッソルコホ氏は「トベルクリン」の由來其製法及使用法に就き近日重て詳細なる報告を爲す由なるか

其際全氏は既に化學的の經驗に依り總て嫉衝すへき物質を淋巴より除去し得るに至りたること並に淋巴の注射は淋巴の成熟と否らさるるに由りて其結果に甚しき差異を生ずるにあらす唯其差異を生ずるはプロフェッソルベルクマン氏の證明せる如く之を使用する分量の多少に關するものなることを説明する筈なりと云ふ

(十二月三日官報)

●金澤醫會の役員改撰

金澤醫會は規則第三十一條に依り去月十三月役員を改撰せしに會頭には太田美濃里、副會頭には高崎精一幹事には長谷川三看、藤本純吉、北村雄平、津川恒洲崎周平の諸氏當撰せり、

●監獄醫定まる

宇野鍋松氏辭職以來久しく空位なりし石川縣監獄醫は去月五日石崎喜一郎氏月俸拾五圓を以て之れに任せら

れたり

●衛生會の慰勞會

金澤衛生支會は同會の功勞ありし人々を古寺町北間樓に招き慰勞の宴を開きたり其招を受けたる者は太田、山田澤田、岡本、松原、上杉、田邊、田中、大屋、平野、不破、瀬尾中村、飯森の諸氏なり

●衛生會の体格試験所

同處は是迄唯志望者の爲めにのみ設けたるか如き有様なれば受験者は月々十名内外の少數に止まりしか本月よりは警察の囑托に應じ巡查の体格試験を引受くる事となれり、同所の成果此に於て一段の光彩を放つへし

●費府の書信

左の一篇は舊石川縣甲種醫學校卒業生にして目下費府在留中なる千秋雄雌郎氏より木村教授に送られたる書信なり彼地醫事概況を知るの便あれば乞て茲に掲ぐる

(時事)

金澤醫學會雜誌

第三卷第二十六號

(五百三十一)

事となしぬ

近日寒冷の候に相成候處益御多祥奉大賀儀陳者迂生
 義本年六月ミシカン大學を卒業し夫れよりニューヨ
 ヲ府に趣き婦人科を專脩致し候當十二月には當地を
 出發しフィラテルヒヤに參り二週間滞在致し二三の
 大家を訪ね後ちに歸國の途に上り度候に付來年一月
 初旬には日本に着するならんと存候……中略……江
 波知輝氏の報に依れば御校も非常に變化致し殆んど
 醫科大學と大差なき由今後一層善良なる醫師の輩出
 するならんと存し奉欣賀候蓋し御校の益々盛大なる
 は迂生等卒業生の大に希望する處に御坐ゆ
 ニューヨーク府には數多の病院學校有之迂生は Post
 Graduate Medical School にて勉強致候當校には教授三
 十七名助教八十名有之婦人科にてエミト氏リー氏チ
 ルソン氏及ホルド氏等の諸教授にてハホルド氏は獨

乙國の産にして獨語に通し萬事獨乙方を以て教授致
 しチルソン氏は「ブルークリン」派の婦人科醫にてハ
 ンリス及リー氏はエミト派に御坐ゆ之れに由り諸氏
 の論する處、手術式等を異にして互に持論を主張し
 申しハンリス氏は頗る英敏なる人にて手術式器械
 などを發明する所少からずゆ
 迂生當校にありし際は月曜木曜及土曜日は婦人科の
 手術日にて數多の手術を傍觀致候會陰手術にはテ
 ト氏の法頗る良成積有之申し然し大抵はヅルビユ
 氏の法又はヘーガルの法を用ひ近來アレキサ
 ンドル氏の圓鞞帶短縮術又行はるゝに至り數多の醫
 師は之れに就き報告致し申し然し尤も多きは前屈子
 宮にて有之大抵グレザラント氏の「ベスサーレ」を以
 て治癒に赴き申ゆ
 當地には癰腫に「ピクトアーミン」の皮下注入を試み

申ひへしに其効頗る有之申也

十一月十七日 在ヒラデルヒヤ 千秋雄雌郎

木村孝藏様

●金澤病院彙聞

○丹羽銀之助氏 同院の藥局長心得丹羽銀之助氏は縣屬松義一義と共に藥局監視員を命せられ能州地方巡回中の處去廿六日歸院せられたり、

○慰勞金下賜 去る廿六日金澤病院職員一同へ慰勞として石川縣より金若干圓宛下賜せられしとなり、

○鶴見氏等の後任 本月一日一年志願兵として入營せられたる醫員鶴見金十郎氏の後任は辻本良仲氏にして志田、生駒氏の跡を襲ふ者は藍澤直方、黒川由己の兩氏ならんと云へり、

○丹毒外科病室に入る 先月中頃倭馬として「カルプンケル」患者に丹毒を發せし以來非常の嚴密なる注意をなせしにも係らず尙は二三名の入院患者に傳搬せし

を以て一時外科患者を悉く退院せしめ充分の消毒をなせしと云ふ、

○黒柳精一郎氏 同氏は先日來濕性肋膜炎に罹り兎角此頃は引籠勝なりとの事、

○正誤 前號の金澤病院彙聞中木村院長の令閨か腸弟扶斯に罹られたりと記せしも眞性の弟扶斯に非らざる由なれば此に正誤し又患者數と題する一項中數字を脱せしは編者の粗漏に依る者なれば此段は幾重にも鳴謝す、

○患者數 目下同院の入院患者は外科二十三名内科十九名眼科七名産科婦人科五名なり又外來患者一日の平均は百二十名内外なりと云ふ、

●日本の長壽者

浦嶋太郎か八千歳て武内の宿彌か三百六十餘歳の齡を保ちしと大中古以前に於ける長壽者の相場なり、今明治二十三年十二月の調に於ける長壽者にして百歳以上に達せる者を掲ぐれば左の如し

廣告

醫科 大學 諸子吉人先生校訂
助教授醫學士

本嶋綾三郎先生譯

藥物用法
全壹冊

正價金五拾錢郵稅六錢
紙數四百三拾餘頁
袖珍美本總クロース包
脊金文字入

本書ハ譯者ガ醫科大學ニ在リテ藥物學研究ノ際藥局方
外ノ新藥及其用法等ヲ備載スル袖珍書ナク實地醫家ノ
不便少ラサルヲ感シ主トノ獨國拉氏ノ最新著書ヲ譯セ
ルモノナリ篇チ分チテ藥物分類、比重容量、一般處方摘
要、藥物并ニ處方、追加（解毒藥表、吸入藥表、皮下注入
藥表、溶解表、日本藥局極量表、對症處方索引、及鑛泉略
誌）トナシ新舊藥物ノ用法ハ勿論諸大家處方等ニ至ル
迄遺スナク實ニ實地家及修學諸士ノ掌玉タルハ言ナ俟
タサルナリ

東京市日本橋區本石町四丁目四番地
東京醫學會雜誌賣捌元

發行所 成功堂

◎送別の宴

今回卒業せられたる坂野長三郎、五味川光金、岡本京太郎の三氏は家事の都合に依り證書授與式に先ちて歸郷せらるゝに就き笠間、藍澤、山口の三氏發起人となりたる十五日里見町大野屋に於て送別の宴を張りぬ會する者三十餘名笠間大作、坂野長三郡兩氏の演説あり藤井秀氏は『多年深交縁耶因。恰似同胞骨肉親。花中共樂月明夕。雪裏相訪病苦晨。別淚堪唱陽關句。離情空祈十日雨。てふ即吟を以て三氏を送れり』

◎北越醫會金澤支會の第二總會

同會は去る二十七日第二總會に兼ね今回卒業せられたる會員の爲め祝宴會を花月庵に開ゆしと云ふ